

# ベーコンとポパー

——知識の源泉と妥当性——

高 島 弘 文

## 目 次

- 〔1〕 ベーコンの方法思想
- 〔2〕 「光をもたらす実験」と「成果をもたらす実験」
- 〔3〕 「発見の方法」と「証明の方法」
- 〔4〕 ギリシアの詩人的伝統——知識の神聖な源泉——
- 〔5〕 認識論の中心問題

### 〔1〕 ベーコンの方法思想

まずは、ベーコンの方法思想を簡単にスケッチすることから始めよう。真理を認識するためには、まず最初に、われわれの知性をとらえ、そこに深く根を下ろしている先入の偏見、つまり虚偽の幻像——ベーコンはこれをイドラと呼ぶ——を除去しておかねばならない。これが自然研究に先立って、まずしなければならないことである。なぜならイドラによってわれわれの知性の鏡は曇らされ、あるいは歪められてしまっていて、たとえ感覚から、自然についてのありのままの情報を手渡されようとも、とうてい真理を認識することなど、できないからである。

「……平らでない鏡が対象からの光を、それ自身の形と切断面によって歪めるように、精神もまた、感覚を通して事物から印象を受け取るとき、それをあるがままに伝えるとは信じられず、それ自身の概念をつくるさいに、事物の本性に自分自身の本性を混ぜ合わせることは、まったく確かである。」<sup>(1)</sup>

ところでベーコンによると、イドラは大別すれば4種になり、それらはそれぞれに、(1)種族のイドラ、すなわち人間の本性に由来する偏見、(2)洞窟のイドラ、すなわち各人の生まれつき、受けた教育、習慣などに起因する偏見、(3)市場のイドラ、すなわち言葉と事物そのものを混同することから生ずる偏見、(4)劇場のイドラ、すなわち伝統の権威によって、一般に承認されている学説や概念——である。

では偏見を捨てたのちは、いかなる手続が必要か。経験——ベーコンは「感覚と個別的なもの」という言い方もする——に接し、経験から理論つまり普遍命題——ベーコンの表現によれば「公理」——を導出して行かねばならない。しかし、このとき肝心なことが2つある。ひとつは、経験から普遍命題へ昇る知性の運動に関する事柄であり、いまひとつは、知性の上昇運

動の出発点（科学の出発点といってもよい）となる、経験そのものに関する事柄である。

まず知性の運動について述べよう。知性が経験から理論を引き出すとき、2つのやり方が可能である。ひとつは経験から、もっとも普遍的な理論に、一気に飛躍するやり方である。知性はその後、そのもっとも普遍的な理論つまり原理から、三段論法によって中間の普遍命題に降りてくる。これが今までのやり方である。しかしここに、未だ誰も試みていない、もうひとつの方法がある。それは経験から一步一步、段階的・連続的に上昇することによって、じょじょにより普遍的な理論を引き出し、最後に原理に到達する方法である。これが正しい方法である。そういうわけで「知性は翼を与えられるべきでなく、跳躍や飛翔をしないように、むしろ重しをつけられるべきである。」<sup>(2)</sup>

「真理を探究し発見するには、2つの方法があり、またありうる。そのひとつは、感覚と個別的なものから、もっとも普遍的な公理へ飛翔し、そしてこれらの原理（その真理性は、確立されそして不動のものともみなされている）から、中間の公理の判断や発見へと進むものであり、いまひとつは、感覚と個別的なものから漸進的で、かつ途切れのない上昇によって公理を引き出し、最後にもっとも普遍的な公理に到達するものである。後者が正しい方法であるが、しかしまだ試みられていない。」<sup>(3)</sup>

つぎに科学の出発点となるべき「経験」について述べよう。従来は普遍命題をうち立てるには、単純枚挙による帰納法によっていた。すなわち少数の、それも手近にある事例だけから断定を下していた。そのため、その結論は、のちになって矛盾的事例が発見され、覆されるというのが常であった。そこで単純枚挙による帰納法に代わる、新しい帰納法を開発しなければならない。すなわち、非計画的に、行き当たりばったりにえられた、いわば行きずりの経験から推論するのではなく、計画的に事例を蒐集して、十分にしかつ適切な事例を整え、そこから理論を導き出さねばならない。そしてこの新しい帰納法は、低次の普遍命題も、そしてまた第1原理も含めて、すべての階層の理論について、それらが発見するために用いられねばならない。<sup>(4)</sup>

ここでベーコンの新しい帰納法の、ひとつの例解を与えておこう。たとえば熱現象の原因を発見しようとする場合について述べよう。さきの「計画的に事例を蒐集して、十分かつ適切な事例を整える」ということは、具体的には、つぎのような3つの事例表を作製することである（そのためには、のちに分かるように実験が必要である）。

- (1) 「現在表」 問題の熱現象が現に表われている事例を集めたもの。
- (2) 「不在表」 その他の点では現在表の事例と同じ性質を示すのに、ただ問題の熱現象だけが見出されない事例を集めたもの。
- (3) 「程度表」 問題の熱現象が、さまざまの程度をもって現われている事例を集めたもの。

さて、このような事例表がつくられると、つぎにそれら3表に盛られた事例を、相互に突き合わせ比較することによって、熱現象の存在するところには必ず存在し、熱現象の存在しない

ところには存在せず、熱現象に比例して増減するもの、を見つけ出すのである。これこそ、熱現象の原因たる資格を完備したものである。こうして、十分かつ適切な経験から熱現象の原因が発見される。言いかえれば、熱現象の原因に関する理論が引き出される。

ここで、つぎのことを付言しておこう。ベーコンは、「いわば手づかみの貧弱な経験と、もっともよく見られる少数の個別的事例」から引き出された理論、つまりは単純枚举による帰納法によってえられた結論を、「自然の予断」<sup>(5)</sup> Anticipation of Nature と呼び、彼の新しい・真の帰納法によってえられる結論のことを、「自然の解明」 Interpretation of Nature と呼んで、両者を厳密に区別し、つぎのように述べている。

「私は自然の問題において通常用いられている人間推理の結論のことを、区別のため自然の予断（軽率で早まったものであるから）と呼ぶ。そして正しい、方法的な仕方です実から引き出される推理のことを、自然の解明と呼ぶ。」<sup>(6)</sup>

## 〔2〕「光をもたらす実験」と「成果をもたらす実験」

以上のスケッチから明らかなように、ベーコンの方法思想はこれを要約すれば、すでに持ち合わせている一切の概念、一切の理論を先入の偏見として排除し、白紙の状態の精神でもって経験つまりは感覚からスタートすべきであり、そしてそのときも、知性をその自発的な活動に任せず、真の帰納法という道具によってこれを補助し（実際には、その飛翔運動を制限することになる）、正しく活動せしめねばならない、というにある。すなわち、ここには感覚を知識の權威ある源泉として定めるというのと、知性を真の正しい帰納法に従わしめるというのと、2つの提案が見出される。

ここで問題にしてみたいのは、前者の方である。ベーコンは、感覚の信憑性の問題をどう考えていたろうか。これに関する彼の考えは、つぎの引用に明白である。

「感覚は、ふた通りの仕方です失敗を犯す。それはときとして情報を与えず、ときとして誤った情報を与える。すなわち第1に、感覚は大へん健全で妨害を受けない場合にさえ、大へん多くのものを見逃してしまうが、それは、そのもの全体が細微であるためか、その部分が微小であるためか、その在る場所が遠いためか、その運動がのろく、あるいは速いためか、その対象がなれ親しまれているためか、その他のためかである。さらに感覚が事物をとらえる場合にも、その捕捉は大して信頼のおけるものではない。それというのも、感覚の証言と情報は、いつでも人間に準拠しており、宇宙に準拠しておらず、したがって、感覚を事物の尺度だと主張することは、大きな誤りであるからだ。」

「そこで私は、これらの困難に対処するため、熱心・誠実に、あらゆる面で感覚に対し補助手段——すなわちその欠けているところの補足と、その誤りの修正と——を供与しようとした。といっても私は、これを器具によってよりも、むしろ実験、によって果そうとした。というのは実験の精緻であることは、感覚（それが精巧な器具によって助けられる場合でさえ）自

体のそうであるよりは、ずっとまさっているからである。——そして私がここで言う実験とは、問題になっていることをはっきりさせるという、明確な目的のために、上手に人為的に考案された実験、のことである。したがって私は、感覚の直接的な固有の知覚を大して重く見ずに、感覚の役目は、ただ実験について判断することにあるとし、事物についての判断は、実験そのものがこれをするように工夫するのである。こうして私は、感覚（狂気であることを欲しなかり、自然に関する知識は、すべてそこから求めねばならない）の真の祭司の役目と、感覚のお告げの未熟でない解明者の役目とを遂行することを考えている。そしてまた、他の人たちがただ口さきだけで、そうするのに反して、私は実際にも感覚を支持し、それとの交わりを求め<sup>(n)</sup>ることを考えている。」

要するにベーコンは、感覚の欠陥を指摘したうえで、「実験」によってそれを補助すれば、その欠陥を埋めることが可能だとし、そのうえで、改めて感覚の支持者となることを宣言している。つまりは、実験によって感覚の權威を回復することを企てている。実験によって感覚の誤りやすさが、果して克服できるかどうかは、今はおくとして、ベーコンが、「自然の予断」ではなく「自然の解明」がえられるためには、どうしても実験に頼らねばならないと考えていたことは、確かである。「行きあたりばったりの行きずりの経験」あるいは「手づかみの貧弱な経験と、もっともよく見られる少数の個別的事例」、要するに偶然の観察、を集めただけで、そこから結論するのでは、「予断」しかえられない。真の帰納法のためには、事例が計画的に蒐集されなければならない。「現在表」「不在表」「程度表」の3表をつくらねばならない。そのためには事物のどういう隠された部分を見る必要があるか、そして、それを見るにはどうすればよいのかを判断し、人為的に技術によって、事物のそうした部分を切開ししなければならない（ベーコンが、「事物についての判断は、実験に行わせる」と言っているのは、このことである）。しかし実験が技術によって切開した切り口をのぞいて見るのは、感覚の役目である。感覚は与えられたものを見るだけのことしかできない。自然が与えたものにせよ、実験が与えたものにせよそうである。（ベーコンが「感覚の役目はただ実験について判断することにある」と言っているのは、このことである）。要するに「自然の解明」をうるためには、自然が偶然に与えてくれる観察（ベーコンの言葉では「感覚の直接的な固有の知覚」）だけではだめで、計画的にえられた実験結果の観察、実験結果についての感覚の知覚、が必須だということである。

ところで上述の「実験」は、科学の出発点となる実験、帰納法によって真なる理論を発見するに役立つ実験、である。ベーコンはこうした実験のことを「光をもたらす実験」と呼んで、これを「成果をもたらす実験」から厳重に区別した。ここに「光」とは、真なる理論のことである。「成果をもたらす実験」というのは、すでに職人や技術家がやっていたように、そこから理論を引き出すことは考えないで、すぐさまの実用的成果を求めて企てられる実験、のことである。たとえば錬金術師の実験がそれである。

「なおまた、機械的実験は実に豊富であるにもかかわらず、知性にとっての情報として有益

なものは、非常に少ない。というのは職人は真理の探究など、まったく念頭におかず、彼の特殊な仕事にかかわるものだけに注意を限局し、その他のものには心を向けず、また手を伸ばさないからである。しかしながら、それ自体としては役に立たぬものでありながら、原因と公理の発見に役立つような多様な実験が、自然誌のうちに取り入れられ集められたときにのみ、知識の一段の進歩に希望を抱く、十分の根拠があるであろう。そして私は《成果をもたらす実験》 experiments of fruit と区別して、この種の実験を《光をもたらす実験》 experiments of light と呼ぶことにしている。<sup>(8)</sup>」

しかしベーコンは「成果」を求めていない、のではない。むしろ逆である。彼にとって「知識は力」でなければならない。ただ——非常に大切なことだが——「光をもたらす実験」の方が、最後には職人たちの実験よりは、はるかに多くの成果をもたらすのである。実験からえられた真なる理論は、「光」である。それは自然の光が、それまで暗闇に隠されていたものを照らし出すように、われわれにとって有益な新しい事実を、たくさんまとめて照らし出すのである。すなわち彼はつぎのように言う。

「ところで、神は創造の第1日にはただ光だけをつくって、それにまる1日を当て、その日には物質的なものは何もつくらなかった。それと同じように、まずわれわれは、あらゆる種類の経験から、真なる原因と公理を発見することに努めなければならない。そのためには成果をもたらす実験ではなく、光をもたらす実験を求めなければならない。というのも、正しい仕方で発見され確立された公理こそ、われわれの実践にその手段となるものを、ひとつひとつではなく、まとめて供給してくれ、そしてたくさんの成果をひき連れてくるからである。<sup>(9)</sup>」

### 〔3〕「発見の方法」と「証明の方法」

デカルト解釈上の重要問題点として、デカルトが実験を重視していたことを、強く訴える風潮がある。私はかつてデカルトの実験概念を吟味して、デカルトは確かに実験を重視はしたが、しかし彼の言う実験は、仮説を立てることを容易にするための実験であって、決して検証実験——ひとたび立てられた仮説の真偽を判定するための実験——ではなかった、ということ指摘した。<sup>(6)</sup> ベーコンについてはどうであろうか。ベーコンには検証実験の思想、あるいは実験的テストの思想があったであろうか。まずつぎの引用に注目しよう。

「さらにまた、こういう異論も、きっとおこるだろう。すなわち私自身が定めた知識の目的や目標も、真正で最善のものではないと（このことこそ、私が他人について非難する点なのだ）。というのは、真理の観想は、成果のどんな効用や大きさよりも、価値があり高尚であるからであり、そして経験と質料に、また個別的なものの動揺にこのように長い間、かつ熱心にとどまることは、精神を地面に引きずり下ろす、というよりむしろ、騒ぎと混乱の地獄にそれを沈めて、抽象的知恵の晴朗な静けさ（この方がずっと神秘的な状態であるが）から引き離し遠ざけることに、なるからであるという。ところで私は、これに快く同意する。そして実際、彼らが選

ばるべき重要なものとして指摘するこのことこそ、私が他のなによりも、心がけて行っていることである。というのは、私は人間の知性のうちに、世界の真なるモデル——人間自身の理性によって、そうあると定められたようなものではなく、世界が現にそうあるような——をうち立てようとしているからである。しかしながらこのことは、世界を非常に骨折って分解し解剖しなければ、なし遂げられない。しかし私は、人々の空想がもろもろの哲学体系のうちにつくり上げた、世界の馬鹿げたサル真似のような模倣は、ふっとばしてしまわねばならぬと断言する。したがって人間精神のイドラと神の精神のアイデアとの間には、（私が上に述べたように）どれほど大きな違いがあるか、人々に悟らせねばならない。すなわち前者は勝手気ままな抽象の産物にほかならないに反して、後者は真実の精巧な線をもって、質料のうちに刻みつけられ明示されたところの、創造主自身の創造の印章である。それゆえに真理と効用とは、ここにおいてはまったく同一のものであり、そして成果そのものも、それが生活の便益に貢献するものとしてより、真理の保証としての方が、いっそう大きな価値をもつことになるのである。」（下点筆者）

この長いアフォリズムの要旨は、つぎのようであると思われる。すなわち、ベーコンは理論の効用を重んじて、真理の発見を軽視しているという非難がある。しかしそれはまったくの誤解で、自分は真理の発見を目的としているのだ。それも当然のはずで、理論はそれが真理でなければ、われわれに効用をもたらすはずが、ないからであると。

しかし気になるのは、下点をほどこした、最後の一文である。この一文は、ベーコンが理論の成果を求めるのは、成果の効用性を目的としてよりも、むしろ成果による理論の証明を求めてのことである、という意味にも、とれなくはない。もしそう受け取るなら、ベーコンの方法というのは、経験から帰納法によって理論を引き出し、つぎにその理論から、演繹法によって結論を導き出し、最後にその結論を実践の場面で試してみるやり方だということになる。したがってベーコンは、理論の真理性は、その理論の実践的成功によってはじめて、言いかえれば成果によってはじめて証明されると考えていた、ということになる。つまり実践的適用に、検証実験あるいは実験的テストの役目を課するという考えである。

しかし私は、こういう解釈は行き過ぎではないかと思う。というのは、この一文をアフォリズム全体の中に置き戻してみると、ベーコンは効用性を偏重しすぎているという非難が、誤解に基づく非難であることを強く印象づけるため、逆に、理論の成果のもつひとつの機能であるところの、真理性の保証作用を、いまひとつの機能であるところの効用性よりも、高く評価する言い方をしているだけだ、ということが分かるであろう。しかし、ベーコンが理論の成果は、生活に便益を与えるとともに、理論の真理性の保証にもなると考えていたことは、間違いのないところである。しかしだからといって、ベーコンが理論は成果によって、はじめて証明されると考えていた、ということにはならない。（のちに明らかにされるように、ベーコンは、経験から正しい方法で引き出された理論は、まさにその故に真であり、したがって、正しく引き出さ

れた理論は、当然実践的適用においても成功するはずであると考えていた。言いかえれば、彼の提唱する帰納法によって引き出された理論は、単純枚挙による帰納法によって引き出された理論とは違って、のちになって実践の場面で、反証の憂き目に会うようなことはないと考えていたのである。) ここでいまひとつ、つぎの引用文に目を向けてみよう。

「この種の帰納法によって公理をうち立てるさいには、われわれはまた、そのようにしてうち立てられた公理が、それがそこから導出された、個別的諸事例のみの寸法に合うようにつくられたものであるのか、それとももっと広くて大きいものであるかどうか、調べて試さなければならぬ。ところで、それがもっと大きくて広いものであるなら、われわれは、その公理がわれわれに、いわば副担保として新しい個別的諸事例を示すことによって、もっと大きくて広いことを、確認するかどうか考えてみなければならない。」(下点筆者)

この引用によると、理論が、それがそこから引き出された個別的諸事例より広くて、それらをこえた新しい個別的諸事例をも示すということ、つまりは「成果」をもつということは、ベーコンにとっては、その理論が真であることの「担保」ではなくて、「副担保」 a collateral security にすぎないのである。だから1次担保は別に考えられているはずである。ではベーコンにおいて、それは何であろうか。つぎの引用に注目しよう。

「ところで公理をうち立てるさいには、これまで用いられてきたのとは別の形式の帰納法を考え出さねばならない。しかもその帰納法は第1原理(と言われるもの)についてだけでなく、低次の公理や中間の公理についても、いなくすべての公理について、それを証明し、そして発見するために用いられねばならない。というのも、単純枚挙による帰納法は子供じみたものであって、その結論は当てにならないものであり、矛盾的事例の危険にさらされており、そして大抵の場合、あまりにも少数の事実、それも手許にあるだけの事実、によって断定を下すからである。」

たしかに単純枚挙による帰納法も、理論の「発見の方法」ではある。しかし、それによって発見された普遍命題は、のちに矛盾的事例によって、いつ覆されるかわからない。つまり、その真理性の保証は、何もない。すなわち単純枚挙による帰納法は「発見の方法」ではあっても「証明の方法」ではなく、それには証明の機能はない。それに反して、ベーコンが新しく提案する帰納法は、「発見の方法」であると同時に「証明の方法」でもあるのだ。彼の帰納法で発見された理論は、のちになって矛盾的事例によって覆される心配はない。そもそも、そういう心配のないような方法をつくるのが、目的だったのだ。——このように、ベーコンは考えているのだ。

すなわちベーコンによれば、普遍命題の真理性の第1次担保はまさに、経験からその命題を引き出してくれた帰納法そのもの、であるのだ。ある理論の真理性は何によって保証されるか。——その理論がほかならないベーコンの帰納法によって発見されたものであるという、まさにそのことによって、保証されるのだ。

ではベーコンの帰納法は、なぜ証明の機能をもつと言えるのか。言いかえれば、彼の帰納法

によって発見された理論は、なぜ確実にして決定的と言えるのか。それはまず第1に、単純枚举による帰納法が、いわば手許にある少数の事例から推論するのに反して、十分に整えられ、しかも適切な事例から推論するから、である。そして第2に、知性の跳躍を許さず、一段一段と漸進的に、より普遍的な命題へと上昇するから、である。——要は「十分にして適切な事例」から、しかも「正しい仕方で」ひき出される、からである。この2つの条件のいずれが欠けても、確実な結論はえられない。

ところで「十分にして適切な事例」は、すでに述べておいたように、「実験」によって感覚を補助しなければえられなかった。そして「正しい」推論は、知性から翼を奪い、あるいは知性に重しをつけて、それが飛翔しないようにしなければ、えられなかった。つまりは、知性の働きの大部分を、奪わねばならなかった。この2つのことがなされたときはじめて、帰納法は確実な方法となる。

「さて私の方法は、実行は困難だが、説明は容易である。それはつぎのとおりである。つまり私の提案するのは、確実性の漸進的階段をつくることである。すなわち感覚の証言は、ある修正過程によってそれを補助し装備したうえで、これを使用し続けていくが、しかし感覚の働きにつづいておこる精神の働きは大部分しりぞけて、その代わりに、感覚の知覚から直接に出発するところの新しく確実な道を、精神のために切り開き、くり広げるのである。」

——つまりベーコンは、確実な方法をつくろうとした。「確実な方法」とは、むしろ「確実な結論」を与える方法のことである。したがって彼の方法論においては、ひとたび彼の帰納法で発見された理論は、発見されたのち、改めてその真偽を決定するため実験的テストに付する必要などないはずのもの、そんな必要などないほどに確実なもの、なのだ。つまり検証実験の必要がないのである。ベーコンの方法論の意図は、単純枚举による帰納法の欠陥を克服して、まさしくエピステーメを与えてくれる方法を、つくることにあつたのだ。

デカルトもエピステーメを求めた。そのための方法が演繹法であつた。すなわち知性の直観による明証的な公理から、必然的演繹の連鎖によって一步一步確実に、より個別的なものへと降りて行く方法である。ベーコンの帰納法は、デカルトの演繹法を逆さまにしたもの、である。上から下に向かうのであれ、逆に下から上に向かうのであれ、到達した結論が真であるためには、まず上から下へ、あるいは下から上へたどる知性の運動に誤りがあつてはならないのは言うまでもないが、知性の運動の出発点つまり推論の前提にもまた、それが満たさなければならぬ条件がある。演繹法においては、前提が真でなければならない。帰納法においても、そうである。しかし帰納法においては、それだけではない。単純枚举による帰納法の不確実さを克服するには、前提が十分かつ適切な事例を完備していなければならない。ところで演繹法においては、前提の真理性は、知性の直観の明証性によって保証される。では帰納法においてはどうか。ベーコンは、帰納法の前提が「真であり、かつ十分にして適切な」ものであるためには、どうしたらよいと考えたのか。ベーコン自身、感覚の欠陥を「ときとして情報を与えず、とき



として誤った情報を与える」ところに、見ていたのではなかったか。感覚の知覚は、そのままでは帰納法の前提となりえない。そこでベーコンは、「実験」によって助けることで、感覚のこうした欠陥を解消しようとしたのであった。ベーコンが実験を重視したゆえんは、まさにここにあった。こうして演繹法において、知的直観から真なる結論を導出できるように、帰納法においては、真にして、かつ十分・適切な前提から真理を導出できるのである。つまりデカルトが「明晰・判明の規則」に助けられた知性の直観を、知識の唯一の源泉としたように、ベーコンは実験に助けられた感覚の直観を、知識の唯一の源泉としたのであった。

#### 〔4〕 ギリシアの詩人的伝統——知識の神聖な源泉——

もろもろの偏見を一切排除したのち、感覚——ただし実験に助けられていなければならない——を唯一の源泉とし、そこから知性——ただし、重しをつけられていなければならない——が引き出した理論はエピステーメであって、改めて実験的テストに付する必要などないほどに確実なものである。——こうしたベーコンの思想は、知識の妥当性の問題（えられた知識が真かどうかの問題）は、知識の源泉の問題に還元できるという考えである。以下の節では、ベーコンのこうした認識観を、カール・ポパーがその批判的合理主義の立場から、いかに分析し批判したかを紹介することにした。

ポパーは、デカルトとベーコンには、共通の認識観がひそんでいと指摘する。デカルトの知性本位主義によると、認識は明証的な知的直観（知性の直観）から出発し、必然的な演繹（デカルトによると、演繹もまた知的直観の働きなのだが）の継続によって進展すべきである。つまりは知識の究極の源泉を、知性の直観におくのである。ところがデカルトには、「神の誠実」の思想がある。すなわち神は誠実であり、われわれを欺かないから、われわれの知的直観は、明晰判明であるかぎり真であり、確実であるという。要するに知性の直観は、神によって保証されたものであるが故に、知識の源泉として権威あるものだというのである。

一方ベーコンの経験主義は、知識の源泉を観察（感覚の直観）におくべきだとするものである。ところがポパーによると、デカルトに「神の誠実」の思想があったように、ベーコンには「自然の誠実」の思想とでも呼ぶべきものがあつた、という。すなわちベーコンは自然を、神の御業をしるした書物になぞらえ、しかもその書物は、われわれの前に開かれているという。だから本来自然は、われわれが曇りのない精神の眼で、一字一字ていねいに拾い読みするなら、決して誤読するはずのないものである。つまり自然は誠実にして、われわれを欺かず、というのである。こうしてベーコンにおいては、感覚の直観は自然によって保証されたものであるから、知識の源泉として権威あるものである。

こうして、デカルトの知性本位主義とベーコンの経験主義は、ある点ではまったく対立するものでありながら、しかし共通の根本思想に立つものであるという。すなわち知識の真理性を、その源泉の「神聖な権威」 *divine authority* によって保証できるとする考えが、それである。

つまりは、知識の妥当性の問題を、知識の源泉の問題に還元できるとする考えである。

さらに、ポパーによると、知識の真理性はその源泉の神聖な権威によって保証されるという、こうした教説は、実は長い歴史をもっていて、少くともホメロスやヘシオドスにまで遡ることができるという。

「われわれにとって、自説の源泉に言及する習慣は、学者や歴史家においてはあたりまえのことに思われるだろうが、この習慣が詩人に由来すると知れば、多分いささか驚かされるだろう。しかし事実そうなのだ。ギリシアの詩人たちは、自分たちの知識の源泉に言及している。その源泉は神聖なものである。それはミューズ神なのだ。ギルバート・マレーは、つぎのように記している。“……ギリシアの詩人たちは、われわれが彼らの靈感と呼ぶものだけでなく、事実についての彼らの実際的知識をも、つねにミューズ神に負っている。ミューズ神は‘現前し、そしてあらゆることを知っている’。……ヘシオドスはいつも、自分は知識をミューズ神に仰いでいると説明している。なるほど知識の他の源泉も認められてはいるが、しかし彼がもっともしばしば意見を聞くのは、ミューズ神である。……同様にホメロスもまた、ギリシア軍のカタログといった問題に関して、ミューズ神に意見を聞いている”。この引用が示しているように、詩人たちには、靈感の神聖な源泉のみならず、知識の神聖な源泉——彼らの物語の真実性の神聖な保証者——をも、主張する習慣があったのだ。」<sup>69</sup>

さらにポパーは、このギリシアの詩人的伝統が、ヘラクレイトス、パルメニデス、プラトンに伝わり、近世のデカルト、ベーコンにまで到達していると見ている。特にパルメニデスについては、つぎのように述べている。

「パルメニデスは、一方のホメロスないしはヘシオドスと、他方のデカルトを結ぶミッシング・リンクだと言って、まず間違いあるまい。」<sup>69</sup>

すなわちポパーによれば、パルメニデスは女神ディケーのことを、「真理の鍵の守護者兼保管者」であり、また自分のもつすべての知識の源泉だと述べるが、パルメニデスとデカルトの間には「神の誠実」の教説以上の共通点があり、たとえばパルメニデスは、その真理の守護神から、真理と虚偽を識別するためには、すべての感覚を排除して知性のみを頼らなくてはならないと告げられたのだという。<sup>69</sup>

## 〔5〕 認識論の中心問題

以上で、知識の源泉を重視するという認識論的伝統が、長い歴史をもつことが明らかになった。実際われわれの認識論の歴史は、知識の源泉を何におくべきかという問に対する答の歴史だった、と見ることもできる。しかしポパーは、認識論上のこの伝統的な問そのものの、正当性を問題にする。

「認識論の伝統的な体系は、われわれの知識の源泉に関する問に対して、イエスかノーかを答えることから生まれてきたと言えよう。それらは、この問に一度たりとも異議をさしはさ

むことをせず、あるいはその問の正当性を論議することもしない。源泉を問う問は完全に自然な問とみなされ、誰もそうした問に、いかなる害悪も見出してはいないようである。」<sup>(4)</sup>

非常に興味深いことだが、ポパーは、知識の源泉に関する問が政治理論上の伝統的な問、すなわち「誰が支配すべきか」という問と比較のできるものであり、両者はともに、その精神において権威主義的である、と指摘している。「誰が支配すべきか」という問は、「最善の人」「人民」「多数者」といった答を求めているが、たとえば「人民」という答を要求している人は、人民が支配者になれば必ず望ましい政治がえられるというオプティミズムのうえに立って、「人民」を望ましい政治を保証する権威とみなしている。同様に「知識の源泉は何におくべきか」と問い、たとえば「知性」という答を求めた人は、知性は必ず確実な知識を保証しうるというオプティミズムに立って、また「感覚」という答を期待している人は、感覚は必ず確実な知識を保証しうるというオプティミズムに立って、それぞれに知性を、あるいは感覚を、真理を保証しうる権威とみなしている。これら政治理論上の問と認識論上の問はともに、このようにひとつのオプティミズムのうえに立った権威主義的発想を、共通の特徴としている。

ポパーは上のようなオプティミズムを信じない。そこで彼は、問そのものの転換を提案する。上述の政治理論上の問は、つぎのような問に転換されねばならないという。

「悪しき支配者、あるいは無能な支配者（こうした支配者を、われわれは選ばないように、しなければいけない。それでもやはり、きわめてたやすく、そういう支配者を選んでしまうものだ）が、余り多くの害をなしえないようにするには、われわれは、われわれの政治制度をどのように組織したらよいか。」<sup>(5)</sup>

では知識の源泉に関する問はどうか。この問は、元の問とまったく異なった、つぎの問に転換すべきである。

「いかにして、われわれは誤謬を発見し、消去することができるか。」<sup>(6)</sup>

このような問に、なぜ転換しなければならないのか。それは、政治理論上の問の場合と同じで、われわれには、例のオプティミズムを信ずることが、できないからである。

「〔知識の〕理想的源泉などといったものは、理想的な支配者が実在しないと同様に存在しないのだ。」<sup>(7)</sup>

知識の真理性を保証しうる、権威ある源泉など存在しない。あらゆる源泉が、われわれに誤った知識をもたらしやすいのだ。

ところで、ポパーによる、この問の転換は何を意味するであろうか。——それは、知識の妥当性の問題は、知識の源泉の問題に還元不可能であり、われわれはベーコンやデカルトに反して、妥当性の問題をこそ、認識論の中心問題とすべきである、ということの意味する。

「私の“いかにして、われわれは誤謬を発見できるか”という修正質問は、そのように純粹で汚れがなく、そして確実な源泉など、存在しないという見解、そして起源あるいは純粹性の問題は、妥当性あるいは真理性の問題と混同されてはならないという見解から生じるもの、と

言ってよからう。」

あるいは、ポパーは、つぎのようにも述べている。

「われわれの知識の究極的源泉を説く哲学説の犯した根本的誤りは、起源の問題と妥当性の問題を、十分明確に区別していない点にある。」

ポパーによれば、知識の源泉は、何か特定のひとつに限られるべきでない。いなむしろ限ることなどできない。なぜなら特権的源泉は存在しない、からである。あらゆる源泉を、平等な権利をもつものとして、ひとしく歓迎すべきである。しかし、このとき大事なことは、どの源泉にも権威はないのだということ、忘れないことである。

「源泉はどれも——伝統、理性、想像、観察、またそのほかなんでも——許容できるし、使われていい。しかし、どれひとつとして、なんの権威ももたないのである。」

ポパーは上の引用で、源泉として理性、想像、観察のほかに「伝統」をあげているが、この「伝統」つまり伝統的信念こそ、ベーコンが「劇場のイドラ」として排斥したものである。またデカルト的方法的懐疑も、伝統的信念のサビ落としの作業であった。しかし伝統的信念を排斥する経験主義や知性本位主義の反伝統主義は、誤ったものである。

「〔伝統は〕もっとも重要な源泉のひとつとして、承認することができる。それは、われわれが学ぶ（われわれの年長者から、学校で、書物から）ほとんどすべてが、伝統に由来するからである。」

しかし他面、いろいろの伝統のもつ権威を強調する伝統主義も誤っている。それは、知識の他の源泉、たとえば感覚や知性の直観に、真理性の保証者としての権威を認める認識論が誤っているのと、同じ理由からである。伝統も含めて、あらゆる源泉に、真理性の保証者としての権威など、認めることはできないからである。

ところで、あらゆる源泉が歓迎されるとしても、そのどれもが権威をもたないとなれば、いかなる知識も、その源泉がなんであれ、批判を免れないということになる。

「あらゆる源泉、あらゆる示唆が歓迎される。あらゆる源泉、そしてあらゆる示唆が批判的吟味を免れない。」

どんな源泉にも真理性の保証者たる権威がないということは、知識は、どんな源泉からえられても、すべて推測、つまりベーコンが「自然の予断」として拒否したもの、にすぎないということである。そしてポパーの言う「批判」あるいは「批判的吟味」とは、「誤謬の発見のため、真剣に反駁を試みることを意味する。そして、その反駁の試みは、主として実験による。すなわち推測と事実との照合、による。ポパーにおいては、ベーコンやデカルトにおけるのとは異って、実験的テストが不可欠である。こうしてポパーの方法は、これをつぎのように要約できる。——源泉を選ばず、推測をえてはそれを批判的吟味にかける、すなわちその誤謬を発見する目的で実験的テストにかける。「推測と反駁」——ここに、われわれはポパーの批

判的合理主義の要約を見ることができる。

註

- (1) P. 22, 'The Great Instauration'. ベーコンからの引用はすべて 'F. Bacon: The New Organon and Related Writings' edited by F. H. Anderson, Bobbs-Merrill. による。
- (2) P. 98, 'The New Organon, Bk. I, CIV'.
- (3) P. 43, *ibid.*, XIX.
- (4) P. 96, *ibid.*, C. PP. 98—99, *ibid.*, CV.
- (5) P. 44, *ibid.*, XXV.
- (6) PP. 44—45, *ibid.*, XXXVI.
- (7) PP. 21—22, 'The Great Instauration'.
- (8) PP. 95—96, 'The New Organon, Bk. I, XCIX'.
- (9) P. 68, *ibid.*, LXX.
- (10) 「デカルトにおけるアポステリオリな証明法」, 京都府立大学学術報告・人文・第28号, 昭和51年。
- (11) PP. 113—114, 'The New Organon, Bk. I, CXXIV'.
- (12) P. 99, *ibid.*, CVI.
- (13) PP. 98—99, *ibid.*, CV.
- (14) PP. 33—34, 'The New Organon; Author's Preface'.
- (15) Karl Popper, 'Conjectures and Refutations, 1974', p. 9. (C. & R. と略称)
- (16) *Ibid.*, p. 9.
- (17) *Ibid.*, p. 9.
- (18) *Ibid.*, p. 25.
- (19) *Ibid.*, p. 25.
- (20) *Ibid.*, p. 25.
- (21) *Ibid.*, P. 25.
- (22) *Ibid.*, p. 25.
- (23) *Ibid.*, p. 24. ポパーがこのような2つの問題を区別するのは、もちろん厳密に言えば、歴史的知識とは区別される何らかの科学的知識についてである。ポパーはこの引用につづけて、つぎのように述べている。「もちろん史料編さんの場合には、この2つの問題が、ときおり一致することがあろう。歴史的主張の妥当性の問題がもっぱら、あるいは主として、ある種の資料の起源に照らしてテストできることは、ありうる。しかし一般的には、これら2つの問題は異なっている。」
- (24) Karl Popper, 'The open Society and its Enemies', Vol. II, p. 378.
- (25) *Ibid.*, p. 378.
- (26) *Ibid.*, p. 378.
- (27) C. & R., p. 27.
- (28) ポパーの批判的合理主義の方法論については、拙著『カール・ポパーの哲学』（東大出版）・第1章・第2節を参照されたい。